

宮尾登美子

松風の家
上



宮尾登美子

松風の家

江苏工业学院图书馆
藏 书 章



文藝春秋

松風の家 上巻

一九八九年九月三十日 第一刷
一九九〇年三月十日 第四刷
定価はカバーに表示してあります

著 者 宮尾登美子

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号 一〇二
電話東京 (〇三) 二六五局 二二二一

印刷 凸版印刷 製本 大口製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

〈目次〉

第一章	秘めぐと	7
第二章	観音さん	42
第三章	山賤 ^{やまがっ} の門	77
第四章	妙寿庵	110
第五章	宗匠帰洛	145
第六章	松隠席	179
第七章	いよさま	212

松風の家

上巻

装丁 中島かほる

装画 渡辺始興筆『四季草花図屏風』左双（部分）

扉・見返しカット 野田弘志

財団法人畠山記念館蔵

後之伴家系図

千利休

三
代 伴 秀旦

四
代 喜叟秀室

五
代 右叟秀堂

六
代 利叟秀室

七
代 万叟秀堂

八
代 光燈秀堂

九
代 岩翁玄秀

十
代 有徳斎秀室

十一
代 得々斎秀室(君松)
歌子 軀子

真如斎

真鏡院(猶子)

十二
代 恭又斎

いよ

益子

市子 昌之助

十三
代 円諒斎(文吉)

舜二郎 次子 五郎

武市不秀

由良子 哲也

第一章 秘めごと

その朝、由良子は誰よりも早く起き、僅か^な乍らも茶花の畑とされている、母、真鏡院^{めうきやう}猶子^{ゆうこ}の隠居所の裏庭へ足音を忍ばせて入って行った。

もう暫く、誰も手入れをしないと見えて、種を播^まいたはずの肝腎の花よりも雑草のほうが高く伸び上り、ただの草の畑と見紛うばかりに荒れてはいるが、由良子はそのなから昨日昼間、ひそかに見つけてあった秋明菊を一本^き剪り取った。早起きの狙いどおり、花の芯には大粒の涙のような露を含んでおり、それをこぼさぬよう高く捧げ持って奥の家に帰り、榎^{きわら}の水桶の割蓋を取ってそうーっと浸けた。

陽の登らぬうちに一走り、聚光院^{じゆこういん}に眠る亡き夫の墓前にこれを供えようという心積りの早起きなのだけれど、十月の朝の露^もも薄れ始めた今、もう庭にもはしり元にも人影が動いていて、こっそりとは抜けられそうもなかった。

この家の朝は、「早起きも修行のひとつ」がなお生きていて、辺りが明るくなった頃には家の

内外の掃除はすっかり済ませ、客のあるなしに拘らず露地には水を打って、今日一日の始まりをしつかりと示しておかねばならぬ。これらは表の、業躰ぎやうたいさん、と呼ぶ内弟子たちの仕事だが、一つ屋根の下に起居するこの家の家族も朝寝は許されず、洗面身じまいを済ませた者から順に御祖堂そどうと呼ぶ先祖の像を祀る部屋まちに詣り、そのあと業躰たちの点てた朝茶を一服喫してから茶の間に顔を揃えることになる。

邸内の隠居所に一人住む今年六十歳の真鏡院は、いまだにこの家の家長の重みがあつて、切下げ髪きりげの頭は一筋のこぼれも見せず、背筋をしゃっきりと伸ばしていつも卓袱台ちやぶだいの真中の位置に着く。明治も末の四十二年、十月のこの朝の食卓は殊更賑やかで、真鏡院の差向い、両脇には由良子の兄に当る当主の円諒齋えんりやうさいとその妻益子、夫婦の長男、十七歳の昌之助、長女市子、次女次子、末子で十歳の五郎が顔を揃え、端近くに由良子と息子の哲也が並べば欠ける頭はもう無いが、子供たちは朝粥の一椀を掻き込むなり皆、学校へと飛び出してゆき、後には大人四人、珍しく話が弾んでいる。

日頃口数の少ない円諒齋も今朝は由良子にやさしい目を向けて、

「今晚のことは、うちの仲秀保がすべて取仕切ってくれるさかいな。お前は何も心配要らへん。

そやな、自分の着るもんだけ揃えておおきいな」

といえば、母親だけに真鏡院は、

「そや、そや。由良子あんたは裾模様一枚も持ってへなんだな。私の着やはるか。一寸高等こうとうやけど、寸法はそのままで合うと思うわ」

と勧め、由良子の顔を見上げながら、

「髪はどないおしやす。髪結さん呼ぶか、それともあんた自分で行て来やはるか」

「うちのへ由良子は軽く手を振って、

「そんなもん、一人で結います。毎日結うてるのどすもん。どうぞ大袈裟にせんといいとくれやす」

と頼めば、円諒齋と真鏡院は顔を見合わせて、

「そうやったなあ」

とうなずいた。

この家では、今晚遅く、今年後厄の由良子が二度目の婚礼を挙げる手はずになっており、相手はすぐ向いの本法寺の坊に住む益子の実弟、北盛行であるところから極く極く内輪で、ということになっている。十月は名残りの月で、花も咲き残りになるけれど、由良子は十四歳の哲也を抱えているし、盛行も三歳の克一を連れていて、しかもこの縁組は兄妹、姉弟同士の昵懇の間柄という理由も加わり、盃はほんの真似ごと、列席者は近親者だけで済ませ、親戚筋へは明日、二人で挨拶に廻るといふ略しかたになっているのであった。

話が決まったのはつい十日ほど前のことで、実はまだ哲也にも明かしてはおらず、それに就ては真鏡院が、

「私から話したほうがよろしいやろ。のちほど学校から戻^もておいでたらよう言うて聞かせまひよ」

と請合ってくれ、次いで盛行のほうの支度には、

「益子さん、あんたちよと盛さんのとこ、覗いて上げてくれますか」

と嫁のほうに向くと、それまで視線定まらぬふうだった益子はうつそりと目を上げ、ぐるりと天井を見廻してのち、

「へえ」

と返事しただけであつた。

その常ならぬ様子を見て、円諒斎から、

「益子はまだ病気が十分やないようやさかい、今晚は遠慮さします。盛さんのほうは仲があんじよう計らうてくれますやろ」

と宥め、益子の背を軽く叩きながら、

「あんた、二階でじつと寝といない。さあわし連れてつて上げよ」

と介添すると、益子は素直に夫に従い、そろそろと茶の間から出て行つた。

続いて真鏡院も湯呑みを置いて立てば、これで茶の間の人数は散り、由良子はいまのうちに、と階段下の小部屋に入り、手早く身支度を調えた。小さな鏡箱の中に、目ぼしい化粧道具もない日頃の習慣では、身づくろいすることも格別無いが、それでも襦袢掛けを外し、色別珍を白足袋に穿き替え、羽織だけは着て懷に寺への祝儀袋を忘れず、今朝ほど剪つた水桶の秋明菊を油紙に包んで通い門から通りに出た。花びらの露は案の定、転がったのか消えており、墓前では改めて露を打とうと考えて右の袂には茶笥の古いのを入れてある。

門の通い戸の枢を落すとき、由良子はいつも外出の折にそうするように、表の兜門のほうをちよつと振返つた。十月の朝の陽ざしのなかに、宝鏡寺から北へ抜けるこの通りはしんと静かで、路上には昨夜の木枯しの名残りか、落葉がこぼれている。兜門は石畳一つ奥にあるので、ここか

らは見えないが、門を取巻く生垣の縁を見たとき、由良子が子供の頃から予感として抱いていた思いが、今度の結婚によっていっそう色濃く蘇って来るように思えた。

女は家に男兄弟のある限り、生家が死場所ではないが、由良子はずっと昔から、自分は生涯この垣の内から外に出でず、ここで終りを迎える運命ではないかと考えていて、最初の結婚のとき、それが正しく的中したことを思った。夫は武市不秀ふしゅうという茶名を持つ業躰で、婚礼の日、円諒斎は涙を流しながら二人の手を取って、

「これからは死ぬまで、わしのねきでわしを助けて行つてや。一緒に家を盛立ててや。頼むぜ」と懇願し、由良子は心のうちで、私もとうとうこの家に根付かされてしもうた、と思ったものであった。

それが決して嫌というではなく、むしろ身内ばかりのなかで暮す気易さのほうが勝っていたけれど、若夫婦も加わって一族打集うちあひう朝餉あさけの賑やかさも僅か三年で、不秀はこの世を去ってしまった。以後は、残された哲也を育てながら、この家の台所を任されて来たが、北家から兄嫁も入っていることではあり、時折ふっと、行末のおぼつかなさを感じ、哲也の成人を見届けたのちはこの家を出、髪を下ろして尼僧の姿にでも、と考えていた矢先の、今度の縁談であった。

この垣の内は京都上京区の、堀川の大路から東へ一つ入った小川通りに、家を興してから四百五十年余を数える三茶屋のうちの後之伴家うしろのばんけで、すぐ南側には垣一つを接して前之伴家、少し離れた武者小路通りには武者之伴家がある。三家の祖は、茶之湯を大成した千利休せんりきゅうで、数えて三代目の秀旦しゅうたんのとき、息子の三兄弟がそれぞれ独立し、三男の秀左が前之伴家を、次男秀守が武者之伴家、そして末弟の秀室が後之伴家を立てて今日に至っている。

京都に旧家が多いが、開祖以来の家職をそのままに守って今日に伝える例をいえばそう多くはなく、賀茂禰宜神主の岩佐家、和歌師範の冷泉家等を別にすれば、三伴家がいまその筆頭に数えられるのも茶家という家業のせいもあったに違いない。後之伴家の明日庵は正保三年、秀旦の手によって成り、以後世々代々の当主が明日庵に接して茶室を増築して来たため、現在は兜門から露地にいざなわれて玄関式台に立つと、まず有色軒、その向うに寒霞亭と溜養軒が並び、奥に明日庵と松隠席、梅の井の水元を渡って広間の拙々齋、大炉の間、抛杓齋、三猿齋、剣の間、と合わせて十の茶室と大小の水屋があり、他に台所と茶の間、そして二階がある。各部屋とも炉を切つてある故に無論来客や稽古にも使うが、空いているときは居間にも寝室にもなり、家族、内弟子、女子仕すべてこの一つ屋根の下に寝起きして混然と暮しているようで、その実は確たる区別がある。即ち、家職に関わる用は表、と呼んですべてに優先し、表に対して奥というのは家族や雑の用で、由良子は小さい頃、いつも、「子供は妄りに表に出たらいかん」と言われたものであった。ふしぎなもので、表とは何かよく理解できない年頃ではあつても、釜の懸っている部屋や、大人が墨を磨つて字を書いている場所は厳肅なもの故、心易く近寄つてはいけないという分別だけは持っている。

それだけに、誰もいないとき、家中を一人で歩くと、その広かったこと。近所の家の、表から裏へとさつと一息で通り抜けられる仕組みに較べると、この家は襖を開けても開けても部屋があり、まるで迷路のように曲りくねっていて、しかもどの部屋から景色の変わった庭が見える。まるでお城のようや、と思ひ、自分がここの城主の家族の一人として生れた巡り合わせを考えないではいられなかったけれど、由良子のその感じかたには、多分にこの家の長い歴史と深い関わり

があった。

由良子がもの心ついた四、五歳の頃には、幼名文吉と呼んだ四つ上のいまの円諒斎は既に父の恭又斎きょうまたさいから次期家元としての訓練を受けていて、定めしこの家の茶道史もしっかりと叩き込まれていたに違いないが、それ以外にも、祖母の軀子こから兄弟三人、まるで子守唄のように語って聞かされ、それがいつの間にも、やらの由良子の骨の髄まで浸み透っていたという感じがある。

日頃家族が主として使っている奥というのは、抛杓斎、三猿斎、剣の間で、その他に茶の間のわきの板戸を開けると、倉に接して祖母の寝起きしている陽当りのよい隠居所があった。軀子は娘の猶子とは姿も心も正反對の、まことに触りの柔かいひとで、ものいいも立居もあまりに静かなので、文吉から、

「お祖母さまはうちの三毛みたいだなあ」

といわれ、大笑いしたこともある。

由良子はこの祖母の、糸の目がいつそう柔和に見えて、

「子供たち、皆おいなはい」

と部屋に誘ってくれるときが大好きで、

「お祖母さま、今日のお菓子は何に？」

と聞き、

「お菓子の話やおへんえ。ご先祖さんのお手柄の話ですのえ」

とたしなめられ、

「由良子はいずれよそさんへ嫁よめづかんなんのやけど、伴家に生れたからには、家のことはよう

知っておいてや。覚えといてな」

と頭を撫でてもらい、繰返し祖母の語る後之伴家の由来を聞かされたものであった。

猶子はこの家の娘で、恭又斎は入婿だけれど、軀子もまた夫、得々斎を養子に迎えており、それだけに家を大事に思う気持は一人のものがあつたと思われる。どこの家でも、世代を子に譲つて退いた年寄たちが、その後にはさまさま暗に果す役割は大きいが、後之伴家ではとくに、忙しい両親に代つて、三人の子達にじっくりとこの家の歴史を伝えるのも、軀子の重要な任務であつたらしい。

昔、利休から引継いだ侘び茶を宣揚し、孤高を守ろうとしたために不如意の暮しに落ち、乞食秀旦、とまでいわれた三代目以降からは時代の背景もあつて茶家も物好きの自由を捨てて仕官の道を望むようになり、秀左は紀州徳川家に、秀室は加賀前田家に仕え、秀守は近衛家このえと関わりを深くし、ずっと貴人大名に添つて生きて来たのだと軀子はいふ。茶家の仕官とは、武士のような常勤ではなく、要用の都度召出される仕組みであつて、一旦拝命すると大抵長期に亘り、家の安堵には有難い手立に違いなかつた。

後之伴家では、五代右叟秀堂うどうしゅうどうになつてさらに伊予松山藩の茶道奉行にも召出され、当主は加賀と伊予を往復する暮しであつたと伝えられ、それを軀子は眠くなるような穏やかな口ぶりでゆつたりと語り、

「茶道奉行というのは、ただの茶坊主とは一段違いますのえ。これはもう文吉のほうがよう勉強してますやろけど、お茶は禅と一味どすなあ。そやさかい利休さん以来大徳寺さんにはずっと寄添うて、修行にはここへ入らはつたおひともおしたそうな。ただお茶点ちやてんでて殿さんに差上げるだ